

日本環境教育学会全国大会(第5回～第16回) における小集会の記録

阿部 道彦*・鈴木 善次**・原田 智代***・本庄 眞****
 (社)農山漁村文化協会* 元大阪教育大学**
 せいわエコ・サポーターズクラブ*** 香芝市立真美ヶ丘東小学校****

The Documents of The Meetings in The Congresses (from 5th to 16th)
 of the Japanese Society of Environmental Education

Michihiko ABE*, Zenji SUZUKI**,
 Tomoyo HARADA*** and Makoto HONJYO****
 Rural Culture Association* Osaka-Kyoiku-Univ.(former)**
 Seiwa Eco Supporters Club, Osaka-City***
 Mamigaoka-Higashi Elementary School, Kashiba-City****
 (受理日2005年6月15日)

1 はじめに

1994年の日本環境教育学会第5回大会(神戸)・サテライトシンポジウムとして、「食と農に関する教育」をテーマにした集會が開かれて以来、2005年の第16回大会(京都)に至るまで、「食と農をめぐる環境教育」の集會が10回開催されている。

このレポートは、小集會の企画者として関わってきた筆者らが、集會のテーマ、話題提供者およびその内容、参加者の議論の中で明らかになった「食と農をめぐる環境教育」における課題などをまとめたものである。

初期の集會については記録がなく、開催された大会名や概略のみに留まっている。

2 小集會開催一覧

開催年月日	大会名(会場)	特定テーマ	話題提供者 (敬称略、所属は当時)	話題・タイトル ()書きタイトルは、内容を表したものの
1994年5月15日	第5回 甲南大学	なし	浅井由利子 大阪府立茨木高等学校	(家庭科における南北問題の教材化「エビと貿易ゲーム」)
			木俣美樹男 東京学芸大学	雑穀栽培とその食文化からみたグローバルな環境教育
			橋本卓爾 大阪府農業会議	(大阪府農業会議における環境教育のとりくみ)
			本野一郎 神戸市西農業協同組合	(神戸市西農業協同組合におけるとりくみ)
			森本直樹 八尾市立竹濶小学校	(龍華小学校・竹濶小学校におけるとりくみ)
1996年5月12日	第7回 滋賀大学	なし	参加者	自由討論
1997年5月25日	第8回 横浜国立大学	なし	安溪貴子	田んぼや畑が先生ーわが農村暮らしと若者の声

開催年月日	大会名(会場)	特定テーマ	話題提供者 (敬称略、所属は当時)	話題・タイトル () 書きタイトルは、内容を表したものの
1997年5月25日	第8回 横浜国立大学	なし	原田智代	ネグロス島のバナナ栽培から見える食と農の教育
			吉岡 学 長岡京市立長岡第5小学校	「土・生態系」
1999年5月23日	第10回 東京学芸大学	なし	阿部道彦 (株)農山漁村文化協会	(食と農をどう教えるか)
2000年5月28日	第11回 戸倉上山田中学校	田んぼ・家畜・<いのちのつながり>から環境教育を考える	湊 秋作 キープやまねミュージアム	休耕田を子どもと生き物のパラダイスに
			角田淳史 牟礼村立牟礼西小学校	ブタの生、性、死と向き合った2年間
			磯貝春巳 横浜市・農業	農家の屋敷回りは生き物がにぎあう場
2001年8月19日	第12回 九州国際大学	<いのち>と<人々の暮らし>を結ぶ活動	宇根 豊 農と自然の研究所	田んぼの指標生物を調べよう
			桜木陽子 鞍手町立室木小学校	ダイコンの秘密をめぐる実験が次々と
2002年5月26日	第13回 宮城教育大学	食べる人が食の現場を体験する活動等	岩淵成紀 仙台市科学館	田んぼの生き物調査
			星 智宏 JAみやぎ仙南(青年部)	都会の子どもの農村体験支援活動
			高橋幸子 仙台市立生田小学校赤目分校	一本のイネから100本のイネに大へんしーん
2003年6月 1日	第14回 愛知教育大学	子どもと考え・実践するスローフード(地域に根ざした食)	荻野嘉美 額田町立大雨河小学校	地域の方で本格的な水車を復活 食のおもとに迫る「ふるさと総合学習」
			黒柳令子 愛知教育大学附属小学校	世界の食文化・郷土の食文化への理解を深める学校給食
2004年8月1日	第15回 立教大学	都市と農山漁村を結ぶほんもん体験	勝野美江 農林水産省	“キッズ通貨DE農村体験ツアー”の取り組みについて
			秋山眞兄 『季節の学校キララ』	季節の学校「キララ」
2005年5月22日	第16回 京都教育大学	食と農をめぐる環境教育の動向と実践報告	鈴木善次	日本における食環境教育分野の理論的・実践的研究の動向
			吉岡 学 亀岡市立亀岡小学校	実践報告「地産地消と環境問題」

3. 集会の趣旨

本小集会を開催することにした趣旨は以下のとおりである。

「地球規模の環境問題と自分のかかわりを認識し、日常生活を見直すことの必要性がある中、

1) 「人間は生物であり、生態系の一員」という自覚

2) 「循環」概念の学習

3) 人工化学物質にまつわる環境問題の学習

4) 食文化の学習を通じて文明問い直しの教育

5) 地域に根ざした総合的な学習

これらの学習を進める上で、「食と農」の教育が果たす役割は大きい(1994年第5回大会、「集会開催の趣旨」)。

グローバリゼーションの進行により、その影響を受けている「食と農」を考えるため、消費者教育の必要性が求められる。縮小する一方である我が国の農・林・漁業のあり方にも触れざるを得ない。産業教育、職業教育でもない、生きる基盤となる「食と農（林業・漁業も包括する）」の教育をすすめるなくてはならない（1999年第10回大会）。

「総合的な学習の時間」の導入後の第11回大会以降は、「総合的な学習の時間」における可能性を引き出すために、大会が開催される地域において先進的な取り組みをされている方々から実践報告をしていただき、参加者と「食と農」の教育をめぐる課題について議論を深めている。

4 食と農をめぐる環境教育の可能性・課題

集会の中で話し合われた、教育の場での問題点、「食と農」をめぐる環境教育の実効性、課題等について、記録の残るものから取り上げる。

<第8回大会の発言から>

- 日本の農業を考える時期である。
- 日本の農産物は果たして高いのか、安いのかを検討する学習が必要。

<第10回大会の発言から>

- 「人と人」「子どもと自然」が触れ合える場が足りない。
- 食（の現状）に対する危機感が少ない。
- 食農教育の食・農は自然の恵みを学ぶ場になる。
- 食をテーマにした学習は、自分とのつながりがみえて、学習者にとって楽しい学習になる。

<第11回大会の発言から>

- 農地の維持と生物の多様性の保全は矛盾することがある。磯貝さんのようにそれを両立しようとしている農家は“生きた博物館”であり、都市住民や学校はそれを支えていかなければならない。
- 同じ虫を観察する場合でも、農業としての視点と自然観察としての視点は違う。指導者はそれを見きわめる必要がある。

- 学校農園は広がってきたが地域農業との結びつきは少ない。地域農業の現実や矛盾とも向き合いながら、地域農業にかかわる必要がある。

<第12回大会の発言から>

- 人間が自然からいのちをいただいていることが見えなくなっている。酪農家との提携やアイガモ農法などを通して、生と死をめぐる問題を学ぶ必要がある。
- 農家は農作業のなかで副次的に行っていた仕事を近代化の過程で切り捨ててきた。いまは農家自身が草や虫を知らないし、見ていない。知らないものは排除することになってしまう。
- 生活にかかわる体験を学校だけで進めようとする形骸化してしまう。もっと地域と連携しながら、農業や里山管理の現実が抱える問題点と向き合っていくべきだ。
- ピオトープはあくまで現実の環境と向き合うためのサンプル、モデルである。それを通して、田んぼや水路のありかたを再考し、暮らしと生き物の生存との折り合いをつけていく方法を見出していくことが大切。

<第13回大会の発言から>

- 田んぼの体験では雑木林と用水路と田んぼを探検するなどして、水がどのように使われていて、地域の環境がどのようにかかわっているかを捉えるようにしたい。
- スーパーマーケットに並ぶ食材のもとのかかわりをつくっていく。その場として学校給食を通じた食農教育が有効。

<第14回大会の発言から>

- 大雨河小学校（額田町立）の子どもたちがその後どのように青年期を迎え、育っていったか、ぜひ追跡してほしい。そこから他の地域にも普遍化できる方法が見えてくるはず。
- グローバリゼーションが進み、外食産業に子どもたちが抵抗を持たなくなっている。その問題点に気づかせたい。
- 食が変わったのは学校給食がパン食になったこ

とが大きい。高知県南国市の地場の棚田米を使った学校給食に学びたい。

- 核家族化等が要因となって家庭の食事が規範を失うなか、マスコミ等の情報に踊らされている。学級担任と栄養士が連携して、食を自分でデザインする力を子どもに伝えたい。
- 小中高校の教育課程のなかで土の位置づけが弱い。環境教育のなかで土の重要性をもっと認識する必要がある。

<第15回大会の発言から>

- “たべる”と“つくる”を結ぶというだけでは、社会的な視点が欠ける。食農教育の中で地域の共同性をつくることがベース。
- 都会の子どもと田舎を結ぶ前に、都市の中に拠点を作るべきではないか。

<第16回大会の発言から>

- 「食と農をめぐる環境教育」は「食農教育」や「食環境教育」など様々な言い表し方をされているが、そこで求められるのは「生産」から「消費」までをトータルに環境という視点で学ぶことである。
- 「食農教育」では、「食べる」ことを含めることが重要である
- 地産地消の学習を通じて、地元の「生産」についての関心が高まった。地域を取上げることは、今後の社会像を考えることにつながる
- 「地産地消」の「消費」という言葉に抵抗感がある。食べることを消費とせず、「利用」などと言い換えた方がよいと考える。

5 「食と農をめぐる環境教育」集会から学んだこと

集会に関わった企画者たち自身が集会開催を通じて学んだことを取り纏めた。

◇小集会の企画提案者の立場から 鈴木善次

生態系の中の「消費者」に位置する人間にとって「食」は重要な環境要素であるにもかかわらず、環境教育での扱いが不十分なものであると感じて

いた。そこからスタートさせたこの小集会も10回を数えるまでになった。その間、学校での実践者ばかりでなく、農協、生協など学校外での実践者の方々からのご報告もいただき、この分野に対する関心の深まりを知ることができた。この場をお借りして集会にご協力いただいた話題提供者、参加者の皆さんにお礼を申し上げたい。

ところで、集会では「食・農」をめぐる環境教育に関する活発な議論が展開され、その議論を通して少しずつではあるが、人々の「食・農」への意識改善が見られているのを知ることができた。しかし、世の中では、スローフード運動も見られるいっぽう、相変わらず「袋の味」(冷凍食品など)の「念仏料理」(電子レンジに依存)などファーストフードに漬かっている人々が多い(時には僕自身もその仲間)。

持続可能な社会の構築が目指される今日、「食」環境も当然、その枠組みの中で検討されるべきであり、その意識を持ち、それを実現する「力」を持った人々の育成が求められる。これからの「食・農」をめぐる環境教育(僕はこれを「食環境教育」と呼んでいる)の目指す方向でもある。

そのためには、これから、どのような理念・内容・方法などで「食・農」をめぐる環境教育を展開していくのがよいか。その一つが、参加者の中からご指摘もあったように、学習の場においても、学習の内容・方法においても、社会という視点を持って行うことであろう。そうでないと、「持続可能な社会の構築」という社会変革を促すことはできないのではないか。そのことも含めて、今後の検討課題を整理し、より望ましい「食・農」をめぐる環境教育を模索していきたいと考えている。

◇都市という地域に暮らす者の視点から 原田智代

土を踏める場が校庭か児童公園くらいしか残っていない大阪市内では、「食糧生産」の現場を目にすることは皆無に近い。自分が「生きていること」と農業、漁業とのつながりも意識にのぼらない。また、食べものは商品であり、そこから「命」を実感することはほとんど無いに等しいという感がある。

仙台の集会で報告された「バケツイネづくり」、長野大会での「動物飼育」は自然環境が多く残る地域での実践報告だった。教師たちの実践を通じ、子ども達が「命」や「食べ物」、それらを通じて「人間」について気づいていく様子が伝わった。それは換言すれば、生活空間に田畑が残り、生産活動も身近に見られる地においても、食と農にかかわる学習が今の子ども達に必要であることを意味する。都会も田舎もない現代という時代そのものが生活から「食」、「生産」を切り離している。

第15回大会において「“たべる”と“つくる”をむすぶというだけでは、社会的な視点が欠ける」という意見があった。「食が命を支える」という実感を持った人間に生き抜く力強さは感じられない。地域の共同性など、人が生きていく上で必要なことについて思いをめぐらすことができる土台として、先ず「生きる意欲」と「生きるための基本的認識」が必要だと思う。農体験のない都会人である自分（私）がほんの少しの収穫を得るためにどれほどの努力が必要であるかを身をもって体験しながら、生きること、命、食べものがつながっている実感を取り戻すしかないと思っている。都会に生まれ、育つ子ども達に今、一番大事なのは、楽しいだけでは済まない、食糧を得るための体験ではないだろうか。

◇学校教育に携わる立場から 本庄 眞

生物を中心とした調査を環境教育のテーマにしていた私が「食」と「農」に関心を抱くようになったのは、奈良県民俗博物館における公開講座のお手伝いをさせていただいたのがきっかけだった。「奈良県の大和吉野川流域における柿の葉寿司作りを自然科学の視点で切ってほしい。」という要請をいただいた。柿の葉寿司を「保存食」という視点から見ると、「発酵」や「ポリフェノール」などがキーワードとなろう。柿の葉寿司の素材である鮭、それを巻く柿の葉を調べるうちに、それらが地域の自然あるいは伝統行事とも見事につながっていることが分かった。調べれば調べるほど、伝統食は自然科学的にも、社会科学的にも、人文科学的にも、理にかなった「先人の知恵」だと気づいた。

講座に来ていただいた小中高の先生方などには、座学とともに、実際に柿の葉寿司作りを体験していただきながら、食べていただく。次いで、奈良の「茶粥」に取り組んだ。茶を摘む、茶を蒸す、茶をもむ、など茶を作る工程を実際に体験していただきながら、最後は「茶粥」を食べる。これら伝統食を教材にした学習は、グローバル化した「食」を見直す環境教育の教材になることを確信するようになった。そのような時期に、「食と農をめぐる環境教育」の小集会のお手伝いをさせていただくことになった。世話役をさせていただいたお陰で、様々な地域から、様々な視点で「食と農をめぐる環境教育」の実践や話を聞くことができた。

今、地域社会が崩壊し、家庭が孤立し、学校も「総合的な学習の見直し」に揺らいでいる。「食と農をめぐる環境教育」を進めていくには、体験活動を基本にして、危機感を持つもの同士が、枠や立場を越えて協力しあうことが大切であることをこの集会を通して改めて実感した。体験活動を基本としながら、「発信したい」という思いを持つ子どもを育てることが、現状の方向を変える大きな力になるのではないかと考えてきた。

◇農業・農村の視点から 阿部道彦

この小集会を農業・農村に近い立場にいる人間として振り返ってみると、効率化・近代化のなかで切り捨てられてきた農業の多面的な価値を取り戻そうという動きがこの約10年のあいだに大きく広がっていることに気づかされる。

たとえば、稲作での米ぬか施用、不耕起栽培、冬期洪水などの農法は、除草剤や殺虫剤、化学肥料に依存しない健全な米を生産する手段であるだけでなく、結果として田んぼを“いのちがにぎわう場”に変えていく。その変化の実態を“田んぼのめぐみ”として、農家と子どもたちが共にとらえようという運動も起こっている。湊秋作さん（11回）、宇根豊さん（12回）や岩淵成紀さん（13回）の報告はそれを実践する立場からのものであった。

農業体験を通して農村（生産者）と都市（消費者・子ども）がつながる動きも出ている。都市近

郊では磯貝春巳さん(11回)、農村部では星智宏さん(13回)らJ Aみやぎ仙南の農業者が、子どもたちのバケツ稲づくりを出張指導し、農業・農村体験のために自分たちの農地を開放していることが報告された。そのなかで、農産物の生産者-消費者という関係を超えた農村住民と都市住民との生活者としての関係が生まれている。

さらに、農村では近年手づくりの直売所・加工所が伸び、地場産学校給食を含めた地産地消の原動力となるとともに、地域の伝統的な食材や食文化の伝承の場となっている。

これらはばらばらな動きのように見えるが、全体として「食と農をめぐる環境教育」の場としての<農村空間>の価値を高めているとはいえないだろうか。私自身のことを省みても、都市住民は持続可能な社会づくりにかかわろうという気持ちがあっても、そのベースとなる生活文化をもっていない。都市住民の生活の変革にとっても、その「お手本」として農家の生活文化が“自覚的に”伝承されていく必要がある。それを後押しすることにこれからもかかわっていきたい。